

平成30年度自己評価シート(中間評価)

校番	10	学校名	広島県立尾道北高等学校	校長氏名	松井 太	全日制	本校
----	----	-----	-------------	------	------	-----	----

学校経営目標						
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策	担当部等	
1 課題発見・課題解決学習を推進し、主体的学びを深める。						
(1)生徒自身が学びを振り返ることができている。 (2)ICT を活用し、深い学びにつながる授業を実施している。	○カリキュラム・マネジメント委員会を月2回開催し、目標とする資質・能力の育成について評価し、機能的なカリキュラムの運用について検討する。	B	教育課程全体についての見直しを行うために、カリキュラム・マネジメント委員会を設け、総合的な学習の時間、産業社会と人間、授業改善の指針などの検討を進めているが、前期の会議開催は4回であった。	平成31年度入学生の総合的な学習の時間の年間計画の作成、平成30年度入学生の2年次カリキュラムの見直し、思考力育成のための職員研修の実施を計画的に進める。	カリキュラム・マネジメント委員会	
	○生徒の主体的な学び、深い学びを育成する授業を実践する。 ○「問う力」を育成し、授業評価で検証する。 ○水曜教室を行い、「問う力」「振り返る力」を育成する。(1, 2年)	C	生徒に問いを立てさせる授業について、研究と実践を進めている。その結果、7月実施の授業評価アンケートでは、「問う力」の項目「この授業を受けて、疑問点や質問を自ら見出し、問いを立てるようになりましたか。」の得点率は71.2%で、目標の80%を下回った。	11月の公開研究授業、互見授業に向け、教科で研究・実践を進める。水曜教室は、定時退校日に設定した日であり、趣旨を変更してその時間を活用する。	カリキュラム・マネジメント委員会 教育研究部 各教科	
	○思考力育成をめざし、外部試験GPS-Academicの受験(1学年)を導入するとともに、その職員研修を実施する。	後期			カリキュラム・マネジメント委員会 各教科	
	○ICT環境の整備を進め、効果的な活用による授業改善や業務改善を進める。 ・すべての教職員がICTを活用した授業を実践する。	B	教員のICT機器の使用月平均は、147回(昨年度109回)であり、確実に増え、ICT機器(タブレット)を授業に活用することは日常化してきているといえる。	本年度の重点である生徒の深い学びにつながるICT活用に関する授業の開発及び実践事例の収集・蓄積について推進する。	ICT活用推進委員会	

2 教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす。

<p>(3)生徒が学習意欲を高め、確かな学力を身に付けている。</p>	<p>○教科指導力を向上させる。 ・進研模試(7・1月)を指標とし、習熟度に応じた指導を行い、PDCAサイクルを機能させ、目標管理によって指導の改善を図る。 ・模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげる。(年3回)</p>		別紙		進路指導部 各教科
		B	模擬試験分析会議・スタディーサポート分析会議を実施し、各教科・学年で分析した課題を共有するとともに、解決策の検討を行った。	分析会議で共有した課題の解決にむけて、指導を行う。	進路指導部
		C	1年7月進研模試の平均点偏差値は55.4(前年58.5)である。偏差値50未満の人数が47名(前年18名)であった。	模擬試験やスタディーサポートの結果分析を行い、各成績層に応じた対策や個人面談による指導を行う。	進路指導部・1学年
		C	2年進研模試(7月)の国・数・英の平均点偏差値は58.7(前年59.4)であった。(目標値61.0/1年1月59.9)	模擬試験やスタディーサポートの結果分析を行い、各成績層に応じた対策や個人面談による指導を行う。	進路指導部・2学年
	<p>・センター試験分析(5・2月)を行い、教科指導力の向上につなげる。 ・入試問題研究を行い、その成果を授業、入試問題セミナー、定期考査問題の作成につなげる。(7月以降)</p>	B	新入試(共通テスト)に試行調査、平成30年センター試験の結果、難関大学二次試験、新しいタイプの入試問題について、76.9%の教員がレポートを提出した。	入試問題研究によって得られた成果を、授業改善に活かし、考査問題への作成に反映させる。	進路指導部 各教科
		B	入試問題研究をもとに夏季休業中に入試問題セミナーを実施した。また、夏季補習で、基礎力の充実を図るために文系は国語、数学、英語、理系は数学、英語、理科(物理、化学、生物)の特別講座を実施した。	センター試験分析や入試問題研究と、模擬試験分析からの課題解決に向けて授業や補習、朝学習、総合演習などの内容を改善していく。	進路指導部・3学年
	<p>○英語の外部試験GTEC等外受験に向けて、日常的に4技能育成の指導を計画的に行う。</p>	B	スピーキングテスト自体経験が少ないので、即興で答える訓練として、特に1年生では英語を話す、活用する場面を意識した指導を行っている。英語表現では、毎時間学習した文法を使って作文を(基礎講座は1文、発展講座では2、3文)、コミュニケーション英語では、单元ごとに自分の言葉で要約したり(発展講座は英語で)、内容に関して自分の意見を英語で述べたりする機会を設けた。	広島大学留学生との交流会、エンパワーメントプログラムを新規に実施し、英語を活用する機会を積極的に設ける。	外国語科

【評価結果の分析】

・進路指導部

○模擬試験やスタディーサポートの結果の分析からの各教科の課題を明らかにし、改善を行う。

○1学年

進研模試1月の国、数、英の平均点偏差値62.0を目標値として設定している。7月時点で55.4という状況であった。偏差値50未満の人数は47名であり、下位層の指導に課題がある。家庭学習時間の確保はできているが、成績の振るわない生徒への指導や成績下位層の生徒に対する学習方法について、面談で指導していく。上位層については学年主任、進路指導部など面談を実施し、高い目標を持たせる指導を行う。

○2学年

前回1年進研模試(7月)と比較して、国語が-1.1、数学が+0.5、英語が+1.6であった。家庭学習時間は文系が理系より少なく、課題を持つ生徒が多い。学習時間の多い生徒の中にも成績が振るわず、学習の方法に問題があると思われ、担任面談などでの指導が必要である。さらに学年集会や難関大集会などを通じて、集団で学習に向かう雰囲気醸成する。

○3学年

センター試験への対応が遅れている生徒に対する指導が課題であるため、夏期補習期間の午後に特別講座を実施し、基礎力を充実させる指導を行った。

今後、模試分析の課題を解決するために授業や補習、朝学習、総合演習などの内容の改善が必要である。

3 高い志や夢を持たせ、進路希望を実現させる。

<p>(4) 生徒が高い目標を持ち、その目標を維持できている。</p>	<p>○探究活動、キャリア学習を充実させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「産業社会と人間」(1年次)「エクスプローラーセミナー」では、地域やグローバルに関する課題を発見する。 ・「産業社会と人間」(2年次)では、生徒の進路目標に応じて探究活動に即した訪問先を選定する。 ・「課題研究セミナー」(2年次)では、オープンセミナーや探究的・体験的な活動を実施し、具体的な研究テーマを設定させ、知の総合化を図る。3年次には探究活動をまとめた成果発表会を実施する。 	<p>B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次は、地域課題に取組、校外の大学の公開講座や体験学習に計 65 名が参加した。 ・2年次は探究活動に即した訪問先を計 68 箇所訪問し、課題解決策を提言し助言・示唆を得ることができた。 ・3年次はグループで探究活動を行い、課題探究発表会で成果を公開し、キャリア学習の評価で 99 %が肯定的評価となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次は、後期の前半にフィールドワークを実施し、発見した地域課題をポスターセッションで発表し、次にグローバル課題と関連付けて課題を発見する。 ・研修旅行の成果を課題探究活動に生かす。 ・課題探究活動の成果を自己課題の解決と進路選択に生かす。 	<p>教育研究部</p>
-------------------------------------	---	-----------------	---	---	--------------

【評価結果の分析】

・教育研究部

協働して課題探究活動を行う体制が定着し、課題発見とその解決策を提言する方向となっている。次年度から、海外研修旅行を2年次 12 月に実施するため、研修旅行に向けてのカリキュラム開発及び探究活動の質が今後の課題である。

4 リーダーに求められる道徳性や社会性を身に付けた豊かな心を育成する。

<p>(5) 自律的で社会に貢献する態度(リーダーシップ・ボランティア精神など)を身に付けている。</p>	<p>○時間・ルールを守る生徒を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒会(風紀委員会)が中心となり、前・後期各2回以上、遅刻防止のための啓発活動を行う。 ・生徒会(交通委員会)が中心となり、前・後期各2回以上登校指導を行う。 ・PTA(健全育成委員会)と協力し、交通マナー向上を目的とした下校指導を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・前期遅刻者数は、0.38人/日(32人/83日)である。昨年度0.48人/日(38人/78日)と比較し、減少した。 ・PTA健全育成委員会との下校指導、あいさつ運動をそれぞれ3回ずつ実施した。 	<p>生徒会執行部を中心に、遅刻防止の取組を進める。あいさつ運度を定期的に行う。</p>	生徒指導部
	<p>○全校生徒に対して、部活単位または個人で年に1回以上は参加をするようはたらきかける。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・校内外清掃ボランティアに218名(のべ、9月18現在)参加した。 ・校外でのボランティアに68名が参加した。 	<p>引き続き、校外でのボランティアの周知を行い、参加の呼びかけを行う。</p>	生徒指導部
<p>(6) 生徒一人ひとりの学校生活が大切にされ、相談しやすい体制が構築されている。</p>	<p>○教育相談体制を充実させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期または随時の特別支援教育会議・プロジェクト会議を開き、情報の共有や対応の協議をする。 ・スクールカウンセラーを効果的に活用し、生徒・保護者への支援を行う。 ・教育相談窓口を各学年に配置する。 <p>○不登校予防を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心理検査活用、面談実施から要支援生徒の早期発見・対応につなげる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育会議を定期的に、プロジェクト会議を随時実施し、情報共有や対応協議をした。 ・スクールカウンセラーの積極的活用をおこなうため、生徒や保護者の面談の他、1年次生徒への研修会の開催、会議への出席を定例化した。 ・ライフガイダンスルームを毎日昼休憩に開放した。少数の利用ではあるが、毎月の「ライフガイダンスルームだより」と合わせ、継続していく。 ・教育相談窓口を各学年に配置し、学年主任・担任等の連携を円滑に行えるようにした。 ・支援を必要と思われる生徒について、心理検査やチェックシートを活用し、面談の実施等、生徒理解をすすめた。 ・特別支援を必要とする生徒について、特別支援学校の相談員による、指導・助言を受けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月の「ライフガイダンスルームだより」の発行、「こことからだの相談日」について、生徒や保護者に周知する。 ・引き続き、特別支援教育会議、プロジェクト会議等において気になる生徒に対して、早期に対応できるよう取り組む。 ・2年次生徒への研修会を企画する。 	健康教育部

【評価結果の分析】

・生徒指導部

○遅刻者数については、減少している。生徒会中心の活動はできていないが、様々な場面(集会やHR等)での声掛けもあり、減少していると考えられる。時間にぎりぎりの生徒は、稀に遅刻をするので、遅刻者が少なくなってきたときこそ、校門指導をする教員の声掛けは非常に重要であることが考えられる。遅刻者数が昨年度と比較し、減少した。

○ボランティア活動については、今年度から、校外へのボランティア参加募集を各クラスに掲示し、集約している。昨年度までは、多くは周知していなかったが、今年度から多数募集をかけているので、校外への参加が増加したが、校内外の清掃ボランティアへの参加は、少し滞っている。

・健康教育部

○教育相談体制の充実については、教育相談窓口を各学年に配置し、学年主任や担任等との連携、部としての把握を円滑に行えるようにした。また、特別支援教育会議やプロジェクト会議を随時実施し、生徒の情報共有や対応協議をした。今年度より配置されているスクールカウンセラーについては、生徒向け研修会・生徒や保護者対象面談・教育相談担当との連携を行うことで、積極的活用が出来た。

○不登校予防については、支援を必要と思われる生徒について、心理検査やチェックシートを活用し、部による面談を実施した。その内容を担任・学年・職員全体にフィードバックすることにより、生徒理解をすすめた。

5 社会に信頼される学校づくりを推進する。					
(7) 中高の相互理解を深める取組がなされ、中学校や地域社会への説明責任が果たされている。	○生徒募集活動を充実させる。 (説明会等) ・中学生の訪問受け入れ(5~6月, 体育祭) ・中学校主催の進路説明会(6~10月) ・中学校への訪問(6月~2月) ・オープンスクール(8月) ・本校主催の入試説明会(10月) (資料等) ・広報用資料(学校パンフレット等)の充実を図る。	B	・オープンスクール参加者数は中学生 382(343)名, 保護者等 230(215)名で, 計 612(558)名の参加で昨年より増加した。例年通り生徒が主体の企画, 運営で行った。今年度は, 暑さ対策も兼ね, 体育館での学校説明を模擬授業教室(生徒)と多目的教室(保護者)に変更し, 各教室別で生徒が中心に学校紹介を行った。体育館行事, 学校説明, 模擬授業はともにほぼ 100%の肯定的評価を得た。「大変良い」の評価が, 模擬授業で 76.7%(67.0%)と増加した。 ・広報活動の一環として生徒から募集したデザインを基にしたクリアファイルを作成し, オープンスクールで配付した。 ※ ()は昨年度の数値。	・本校主催の入試説明会や中学校2年生対象の出前授業などで中学生や保護者のニーズに応じた内容を提供し, 募集活動の一層の充実を図る。 ・HP を通じて頑張っている生徒の姿を伝える。	総務部

【評価結果の分析】

・総務部

今年度のオープンスクールは, 暑さ対策も兼ねて, 体育館では開会行事のみ行い学校紹介は模擬授業教室(生徒), 多目的教室(保護者)に分けて実施した。各教室ではオープンスクール実行委員がパワーポイントや動画を活用してプレゼンテーションを行った。事前の準備時間が短く, プレゼンテーションの練習時間は短かったが生徒, 保護者共にほぼ 100%の肯定的評価だった。保護者からは「北高の配慮を感じました」「生徒さんの滑舌がよく気落ちよく聞くことができました」等の多くの肯定的な意見が多かった。

また, 模擬授業の評価が向上した理由として, 教員が有効にICT機器を活用できたことが理由の一つであると考えられる。

6 働き方改革について					
(8) 限られた時間で成果をあげる工夫がされている。	○定時退校日における, 勤務時間終了後 30 分以内の全員退校	C	勤務時間終了まで授業, ホームルーム, 掃除と業務が集中しているので, その後の生徒対応や業務の整理を丁寧かつミスのないように行うこと考慮し, 18 時までの退校に変更した。	17 時 30 分までに業務終了, 18 時までに完全下校を徹底していく。	管理職(教頭)

【評価結果の分析】

ほとんどの教職員は, 定時退校日を意識してその日の業務や前日, 後日の業務を計画的に処理して, 18 時までに退校がしっかりとできている。しかし, ほんの一部の教職員が, 定時退校日を意識していないまたは忘れていた状況で, 当日までにおこななければいけない業務を時間ぎりぎりまで処理し, 18 時を過ぎてしまう場合がある。すべての教職員に意識してもらうために定時退校日の周知を毎回丁寧に行う必要がある。また, 定時退校日だけではなくその他の日においても超過勤務を減らし, 一月の勤務時間の合計が全員 80 時間未満になるように業務改善を組織としてかつ個人として取り組んでいかなければいけない。

各教科

<p>1 課題発見・課題解決学習を推進し、主体的学びを深める。 ○生徒の主体的な学び、深い学びを育成する授業を実践する。 ○「問う力」を育成し、授業評価で検証する。</p>			
教科	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策
国語	B	ICTの活用や協働的な学びなどを取り入れ、生徒が参画できる授業を計画・実践している。また、「問う力」を育成するために基本となる「読む力」をつけるための具体的な手法について、教科会議で共有・検討している。	互見授業や校外の研修会の報告をもとに、11月の公開研究授業(府中高校との合同授業研究会)に向けて課題発見・解決型の授業手法を研究し、共有する会議を設定する。
地歴・公民	B	授業での問いや展開を工夫することにより、授業評価の教科平均では「深い学び」が72.9、「思考力」が82.2となっている。	「問いを立てる」場面、「考える」場面を設定した指導事例を作成する。それを教科内で共有することによって、授業の質を高める。
数学	B	「振り返りによる数学における概念や原理・法則の体系的な理解を深める工夫」を教科のテーマに校内互見授業などで主体的に学ぶことや深い学びを育成することを意識した授業を行った。	生徒の主体的な学び、深い学びを育成し、生徒の振り返りを授業やシート作成を通じて、新たな「問い」が出せるように取り組んで行く。
理科	B	互見授業を通じて教科のテーマに基づいて授業研究を進めている。府中高校との合同授業研究会などの各種研修会に参加し、その知見を共有している。授業アンケートの「深い学び」の教科平均は76.3、「問う力」は72.3であった。	11月の公開研究授業に向けて準備を進めている。これら研究会や研修会を利用し、指導法などについて共有する。
保健体育	B	主体的な学びとなるよう、基礎基本の技能から、戦術や作戦を考えさせ、それらを成し遂げるためのペア学習・グループ活動を積極的に取り入れている。	ペア学習・グループ活動をさらに取り入れ、ゲームや発表できるように、練習方法を考え、実践させていく。
芸術	B	授業評価アンケートの教科平均が、「問う力」71.9%、「深い学び」78.8%、「学習意欲」75.8%と、いずれも学校平均を上回る結果であったため。	自己表現につなげるための基礎基本の確立。単元(題材)の本質的な部分を理解させ、芸術を学ぶ意義を実感させる。
英語	B	互見授業(実施予定)を通じて教科のテーマに基づいて授業研究を進めている。校外の各種研修会に参加し授業研究を進め校内でこれを共有している。授業アンケートの「深い学び」の教科平均は78.8、「問う力」は74.6であった。水曜教室は学年集会等の形で振り返りを行った。	11月の公開研究授業に向けて準備を進めている。これら研究会や研修会を利用しノウハウを共有する。
家庭	B	生活の主体者として、個人・ペア・グループで課題に取り組み表現できるような授業づくりをし、主体的な学びを育成できるようにした。また、授業の最後に振り返りの時間を設け、より理解・思考が深まるようにした。	アクティブ・ラーニングの手法を積極的に取り入れ、生徒が主体的に授業に参加できるよう、さらに工夫をすすめる。

<p>2 教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす。</p> <p>○教科指導力を向上させる。</p> <p>・進研模試(7・1月)を指標とし、習熟度に応じた指導を行い、PDCAサイクルを機能させ、目標管理によって指導の改善を図る。</p> <p>・模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげる。(年3回)</p>			
教科	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策
国語	B	進研模試(7月)の平均偏差値 1年 54.2 , 2年 56.6 各回推移や成績層別の結果分析を行い、教科会議で報告・共有し、授業や考査問題作成につなげているが、PDCA サイクルとして機能させるところまでは至っていない。	取組の成果と課題を継続して教科会議で検証するシステムづくりを行う。特に成績下位層生徒への取組については、他教科とも連携をとりながら重点的に行っていく。
地歴・公民	B	模擬試験の分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成につなげることができた。	主題学習の導入、自己判断をする場面を設けるなどの工夫を行い、その実践例を教科内で共有し、教科指導力の向上に努める。
数学	B	2年進研模試(7月)の平均点偏差値は57.7であり、1年7月57.2から0.5の上昇であり、十分とは言えない。模擬試験での結果分析をもとに講座ごとの授業での展開や定期考査での問題作成に生かしている。	模擬試験結果分析を行い、授業での指導方法の見直しや課題となる分野について各成績層に応じた指導を行う。
理科	B	模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげるようにしている。	模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげ、習熟度に応じた指導について教科内で連携を強める。
英語	B	模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげるようにしている。また、学年を超えて連携を図るようにも努めている。	分析の結果内容から今後の方針を考えることはできているが、結果を出すよう、さらに分析、検討を続けていく。

<p>2 教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす。</p> <p>○教科指導力を向上させる。</p> <p>・センター試験分析(5・2月)を行い、教科指導力の向上につなげる。</p> <p>・入試問題研究を行い、その成果を授業、入試問題セミナー、定期考査問題の作成につなげる。(7月以降)</p>			
教科	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策
国語	B	各自で入試問題研究を行った。3学年は、3展開で入試問題セミナーを実施し、分析結果を授業に反映させた。	研究内容や分析結果を教科会議で共有し、授業や定期考査問題に活かしていく。
地歴・公民	B	日本史と世界史については入試問題セミナーも行き、生徒の二次試験対応力の育成に努めた。地理と公民についてはセンター試験の分析結果を、補習を利用して生徒に還元した。	大学入試センターによって示された思考力の分類に従って入試問題を分析し、問題を解くために必要な力について明らかにする。分析結果を教科内で共有し、定期考査問題や授業に活用する。
数学	B	今年のセンター試験分析をもとに授業での指導を行った。また、入試問題研究により3年生を対象とした入試問題セミナーを実施した。	入試問題研究をもとに、3年生は後期からの演習、2年生は授業などの指導に生かす。1年生は試行調査の分析をもとに定期考査の問題を作成し、授業内容を改善していく。
理科	B	8月を中心に、各自で分析、研究を行った。3学年は、全ての科目で入試問題セミナーを実施した。	教科内で共有する機会を設けるとともに、授業内容に反映させる。

保健体育	B	入試問題研究を行い、その成果を教科内で情報を共有し研修を深めた。	体育進学希望者の3年次生の入試に向けた小論文・実技指導に取り組んで行く。
芸術	B	音、美、書それぞれ取り組むことができた。	3年次生に構成基礎の選択者がいるので、入試に向けた実技指導に生かしていく。
英語	B	8月を中心に、各自で分析、研究を行った。3学年は入試問題セミナーを実施した。	教科内で共有する機会を設けるとともに、授業に活かしていく。
家庭	B	入試問題研究を行い、その成果を授業プリントの項目や定期考査に取り入れた。	他分野についても入試問題研究を行い、授業内容・定期考査に取り入れる。